

平成29年度北海道医学会市民公開シンポジウム

平成29年度文部科学省科学研究費補助金研究成果公開促進費 (B)採択

# 忍び寄る感染症のいま

感染症は防げるのか？防ぐべきなのか？

何が期待できて、何が無理なのか？

日本、そして、北海道特有の感染症と向き合う。

日時

平成29年10月28日（土）

13:00-15:00

会場

北海道大学医学部 学友会館「フラテ」

(札幌市北区北15条西7丁目)

講演者：

国立感染症研究所  
感染症疫学センター長 大石和徳

北海道大学大学院獣医学研究院  
准教授 好井健太郎

北海道立衛生研究所  
主幹 浦口宏二

司会：

北海道大学大学院医学研究院  
教授 西浦 博

●北海道医学会事務局(札幌市北区北15条西7丁目北大医学部内)

電話 011-706-5007

# 「忍び寄る感染症のいま」の開催にあたって

北海道医学会会長 吉岡 充弘

北海道大学大学院医学研究院長・医学部長

北海道医学会は、医学の進歩に寄与することを目的として大正12年に発足した北海道の医師、医学研究者の集まりです。

本会では毎年この時期に市民公開シンポジウムを開催しておりますが、本年は「忍び寄る感染症のいま」をテーマとして開催することになりました。

20世紀後半、予防接種や抗菌薬・抗ウイルス薬の開発、衛生環境の改善などによって感染症流行対策は飛躍的に進展し、数多くの致死的な感染症が制御可能となりました。

とくに、結核による死亡は極めて希なものとなり、1980年の天然痘根絶宣言は人類が誇る感染症医学研究において、画期的な成果となりました。かつての医学専門家の中には、近い将来に感染症の教科書を開かなくても済む時代が来ると考える者も少なくなく、感染症研究は一旦下火になって次第に癌やその他の生活習慣病などの慢性疾患に移り変わっていく傾向も顕著でした。

ところが、21世紀になり、その認識が誤ったものであることを痛切に感じさせられる症例が多数発生しました。2002～2003年、中国広東省を出発点として重症急性呼吸器症候群 (SARS) の流行が世界中に拡大し、2009年には新型インフルエンザH1N1が出現、2010年には宮崎県で口蹄疫の大規模な流行が発生しました。

最近では2014年にかつてない大規模なエボラ出血熱の流行を西アフリカ地域で認め、2015年には韓国において中東呼吸器症候群 (MERS) の流行が複数の医療機関で連鎖的に発生しています。現状では感染症の専門家が不足している状況にある一方、市民は様々な感染症のリスクと向き合うことを余儀なくされています。

この公開シンポジウムの目的は、様々な異なる立場から感染症医学に従事している専門家が問題点と現況について市民と共有し、そのプロセスを通じて感染症専門家としての説明責任を果たしつつ、講演者が取り組む最先端の研究や医療に関する魅力を理解してもらうことです。国立感染症研究所の大石和徳先生による特別講演を含め、北海道の感染症問題を各分野の専門家の立場から解説をいただきます。

本シンポジウムを通じて、私たちの日常において、感染症のリスクと向き合うための基本姿勢を共有したいと思います。